

## 古琉球期における「泊」の形成と展開について

新 田 和 馬\*

### The Formation and Development of “Tomari” During the Ancient Ryukyu Period

ARATA Kazuma

#### 要 約

本稿では、泊村の前身である古琉球期（11世紀頃から1609年まで）の「泊」について、周辺地域や離島との関わりを交えながら論述した。

まず、古琉球期の「泊」については、史料の不足により天久・安里から独立した時期が不明瞭なことから、天久・安里の一部を含めた地域を「泊」として定義した。

次に、「泊」の形成については、13世紀中頃から14世紀末と、15世紀後半の2つの時代に分けて論述した。前者については、天久が港湾地域として機能した可能性があること、後者については長虹堤の築造が「泊」に大きな影響を及ぼしたことなどを指摘した。

そして、「泊」の展開については、泊御殿・大島蔵の設置年代や、泊里主・泊大阿母志良礼の職務、泊系官人の特徴等から考察した。その結果、いずれも奄美群島と深い結びつきを有することが明らかとなった。

本稿で浮かび上がった「泊」の姿は、天久・安里・安謝・銘苅といった周辺地域と結びつき、奄美群島や宮古島へ開かれた域内港だった。特に、奄美群島は天啓4年（1624）に薩摩藩の直轄地となるが、古琉球期には「泊」を通じて沖縄島に影響を与えていたことが判明した。

キーワード：「泊」、泊御殿、大島蔵、泊里主、泊大阿母志良礼

#### Summary

This article discusses “Tomari” (In Ryukyuan, it is called “Twumai”), the predecessor of Tomari-village, during the Ancient-Ryukyu period (from around the 11th century to 1609), including its relationship with surrounding areas and remote islands.

First, regarding “Tomari” in the Ancient-Ryukyu period, it is unclear when it became independent from the surrounding areas Ameku and Asato due to a lack of historical

\* 沖縄大学地域研究所特別研究員 kazumaarata5uji@gmail.com

materials, so we defined the area including parts of Ameku and Asato as “Tomari.”

Next, the formation of “Tomari” was discussed in two periods: from the mid-13th century to the end of the 14th century, and the second half of the 15th century. Regarding the former period, it is pointed out that Ameku may have functioned as a port area, and regarding the latter period, it is pointed out that the construction of the *Chōkōtei* had a major impact on “Tomari.”

The development of “Tomari” was then specifically examined from the dates of establishment of *Tomari-udwun* and *Oshimagura*, the duties of *Tomari-Shatonushi* (Lord of “Tomari”) and *Tomari-Oamoshirare* (Shaman of “Tomari”), and the characteristics of Tomari-officials. As a result, it became clear that all of these had deep ties with the Amami Islands.

The image of “Tomari” that emerged through this examination was that of a region connected to the surrounding areas of Ameku, Asato, Aja, and Mekaru, and an internal port open to the Amami Islands and Miyako Island. In particular, the Amami Islands became a direct territory of the Satsuma Domain in 1624, but it was discovered that they influenced Okinawa Island through “Tomari” during the Ancient-Ryukyu period.

## はじめに

沖縄の人々が泊<sup>とまり</sup>と聞いたとき、何を思い浮かべるだろうか。多くの人は、泊ふ頭ターミナルや泊いゆまちのある那覇市泊<sup>なはしとまり</sup>を想像することだろう。現在、泊は那覇市の一部となっているが、近世琉球（1609-1879）には前島と併せて泊村<sup>とまりむら</sup>（琉球語でとうまいむら）という地域を構成した。泊村は一つの行政区画であったが、「琉球処分」の後に那覇へ編入されたのである。

それでは、近世以前の泊村にはどのような歴史があったのだろうか。古琉球期（11世紀頃-1609）における「泊」の先行研究は、『泊誌』や黒嶋敏氏の論考<sup>1</sup>があるものの、このほかに専論は確認できない。古琉球期の「泊」は未だ不明瞭な部分が多く、実態解明の余地が残されている。

泊村の前身にあたる「泊」の実態を解明するため、まずは「泊」の定義について触れておきたい。筆者は、古琉球期の「泊」を鉤括弧付の特殊な地域として扱う。その理由は、「泊」が周辺地域の影響を受けて形成されたため、境界が不明瞭という点にある。そのことを如実に表しているのが天久・泊村の別称といえよう。『琉球国由来記』には「上泊<sup>ういどうまい</sup>」と「下泊<sup>しちやうどうまい</sup>」の爬龍舟が確認できる<sup>2</sup>。上泊は天久を指し、下泊は天久の南方、すなわち近世における泊村の領域を指している。この呼称から分かるとおり、天久との関わりを抜きにして「泊」の実態を解明することは難しい。また、安里川と長虹堤の存在により水運・陸路の要衝となっていた安里の影響も見逃すことはできない。下泊が天久・安里から独立した時期は、史料の不足により不明である。

以上の理由から、本稿では「泊」を天久・安里の一部を含めた地域として定義する。「泊」を近世の泊村のように明確な区画として扱うことは、「泊」の形成と展開を等閑視し、泊村

の実態解明を阻害することになってしまう。このことを念頭に置きながら、「泊」の実態にアプローチしたい。

## I. 古琉球期における「泊」の形成

### 1. 13世紀中頃から14世紀末における「泊」の様相

#### (1) 英祖王統（1260-1349）の「泊」

王府編纂の歴史書『中山世譜』や『球陽』によると、咸淳2年（1266）に「大島等」（漠然と奄美群島を指す）が英祖王を慕って入貢し、泊村に泊御殿・大島蔵が設置されたという（詳細はⅡ-1で後述）。また、玉城王代（1314-1336）に国が三国に分かれた後、泊村は中山に属したという<sup>3</sup>。これらの記録は傍証史料が確認できないため、当該期に泊村が形成されていたとは考えにくい。

#### (2) 察度王代（1350-1395）の「泊」

「泊」が港湾地域として現実的に姿を現すのは、洪武23年（1390）からである。「よなは與那覇せどとうゆみやとうりゅうきゆうせきひ勢頭豊見親逗留旧跡碑」（那覇市上之屋一丁目タカマサイ公園所在）によると、宮古島の與那覇勢頭豊見親は、洪武23年に中山王察度へ朝貢する際、言語が通じず泊村に3年留め置かれた<sup>4</sup>。本碑文は同時代史料ではないが、入貢年代が明確に記載され、沖縄語・宮古語の間に意思疎通ができないほどの隔たりがあったことが記されている。

豊見親が逗留した場所は、碑文のある天久とみられる。洪武23年の那覇は長虹堤すら整備されておらず、未開発の浮島である。当時、察度王が浦添城や首里城に居住したことを踏まえると、豊見親は那覇よりも天久に逗留した可能性が高い。14世紀末の首里城は、京の内と正殿付近に瓦葺の建物が存在し、グスクとして機能していた<sup>5</sup>。首里城の南付近から天久口（≡泊港）へと流れる安里川には、宮古の船が金城橋付近まで遡上したという伝承がある（詳細はⅡ-1で後述）。安里川河口の天久は、察度王代の首里城整備に伴い、港湾地域として機能した可能性がある。

### 2. 15世紀後半における「泊」と周辺地域

#### (1) 「泊」と天久

中山王尚巴志は、宣徳4年（1429）に山南を滅ぼし、三山を統一した<sup>6</sup>。琉球史では、尚巴志王の父・尚思紹王から尚徳王までを第一尚氏王統、成化6年（1470）にクーデターにより即位した尚円王以降を第二尚氏王統と呼び慣らわしている。「泊」は、尚徳王から尚円王の治世である15世紀後半に発展した。この時期には天久権現が開創されたといわれる<sup>7</sup>。

15世紀後半の「泊」は、下泊よりも天久の方が発展していたとみられる。先史時代からの歴史がある崎樋川さちふいーじゃー貝塚に加え、坂中樋川ふいらなかふいーじゃーや古拝殿、天久グスク、天久権現、大島蔵、

聖現寺など、古来存在する寺院・御嶽等は天久に集中している。泊港についても、『おもしろさうし』15巻で「天久口」と記されていることから、天久が港湾地域として先に発展したことは明らかである（このオモロについてはⅡ-1を参照）。熊本伊右衛門入道円斎が作成した『琉球国図』には、天久の坂中樋川に比定される「飛羅加泊」（フィラカドマリ）が確認できる<sup>8</sup>。

それでは、当時の天久はどの間切に属していたのだろうか。『おもしろさうし』15巻（天啓3年（1623）編纂）には、天久関係のオモロが「うらおそい」（浦添）のオモロとして収録されており、天久が浦添間切に属したことがわかる。『西原間切の天久里主所安堵辞令書』<sup>9</sup>によると、天久は嘉靖15年（1536）の時点で西原間切に属しているので、『おもしろさうし』15巻は少なくとも辞令書の作成された嘉靖15年よりも前の状況を反映している。さらに、『おもしろさうし』15巻には「きたたんの世ぬし」（北谷の世之主）のオモロが収録されており、北谷間切の按司の様子が謡われている。地方の按司は尚真王代（1477-1526）に首里へ集住させられたといわれているため<sup>10</sup>、『おもしろさうし』15巻は15世紀後半よりも前の状況を反映している可能性が高い。このことから、天久は15世紀後半以前、浦添間切に属していたと考えられる。

## (2) 「泊」と安里

安里については、尚徳王が喜界島遠征から凱旋した後に安里八幡宮を開創したことや、康熙37年（1698）まで泊村の爬竜船の頭尾が崇元寺に置かれていたこと<sup>11</sup>、安里親方清賢が上泊に居住していた大浦添親方良憲（馬良詮）の娘を娶っていること<sup>12</sup>から、「泊」と文化的に結びついていた。また、安里は安里川を遡上する船が訪れており、長虹堤の築造後は首里・那覇間における陸路の中間地点となっていた（詳細はⅠ-2-(3)、Ⅱ-1で後述）。安里は付近一帯における交通の要衝であり、「泊」の形成に大きな影響を与えた。

安里の属した地域は二通り考えられる。まず、『おもしろさうし』15巻には天久関係のオモロのなかに安里掟が登場する。先述したとおり、15世紀後半以前の天久は浦添間切に属していたので、安里は浦添間切天久のなかの一地域だった可能性がある。他方、鎌倉芳太郎氏が引用した『毛姓家譜正統』には、安里大親清信（毛興文）が「若狭町安里小路」に居住したとある<sup>13</sup>。そのため、15世紀後半の安里は、若狭町のなかの一地域だった可能性もある。

## (3) 那覇港の発展と「泊」

那覇港の成立には当時の国際状況が関係している。元末明初の紅巾の乱による内乱状態や、前期倭寇の活発化による治安悪化のため、従来の博多から明州へ至る「大洋路」は、肥後高瀬津から薩摩・琉球列島を経て福州に至る「南島路」に変更された<sup>14</sup>。那覇港はこの南島路の活況によって寄港地として利用されたという<sup>15</sup>。那覇港が使用され始めた年代

は、大型ジャンク船の入港を根拠として察度王代に求める説がある<sup>16</sup>。

那覇港が本格的に整備されるのは、景泰2年（1451）もしくは景泰3年に、安里橋からイベガマに至る全長約1 kmを結ぶ長虹堤が整備された<sup>17</sup>頃とみられる。朝鮮人の申叔舟が成化7年（1471）に撰進した『海東諸国紀』の「琉球国之図」には、御物城等の港湾施設が描かれており、那覇港は一定程度整備されていた。実際、御物城から出土した青瓷の時期幅が14世紀末から16世紀前半の可能性があることから、御物城は15世紀中葉に機能していたと推測されている<sup>18</sup>。

琉球家譜では、弘治12年（1499）に本部親雲上政恒（蔡鼎）の家屋が貿易品の出納や売り払いを行う「親見世公堂」となった<sup>19</sup>。嘉靖年間（1522-1566）には仲村柄政賢（蔡靈）が御物城大屋子に就任し<sup>20</sup>、それ以降家譜に御物城職が確認できるようになる。嘉靖7年（1528）には、大里親方盛実（毛見彩）が那覇の最高位職である那覇里主に就任した<sup>21</sup>。

那覇港の整備で「泊」に影響を与えたのは、長虹堤の築造だった。長虹堤を通り首里・那覇間を往来するには、安里を経由しなければならないためである。元来、水運の要衝であった安里は、長虹堤の築造により、陸路面でも要衝となった。15世紀後半における①崇元寺の建立・②安里橋の架橋・③安里大親清信と金丸（尚円王）の出会いは、長虹堤築造により生じたと推測される。

長虹堤は砂泥を堆積させ、<sup>かたばる</sup>潟原という砂汀を形成した<sup>22</sup>。その形成時期は判然としないが、『琉球国図』に「此江湖來往有満乾」（この江湖来往に満乾あり）とあるため、地図が反映した年代と考えられる15世紀中葉には一定程度形成されていた。ただし、地図上の那覇は「石橋」で結ばれた浮島であり、前島は確認できない。そのため、『琉球国図』で「江湖」と表現されるように、当時の安里は入江となっており、そこが天久口と呼ばれたのだろう。その後、土砂の堆積により前島が形成され、安里は奥まった地となり、天久口は狭隘な泊港となる。近世の潟原では製塩業が営まれ、人口増加に伴う宅地化も実施された。

## Ⅱ. 古琉球期における「泊」の展開

### 1. 泊御殿と大島蔵の設置年代について

泊御殿・大島蔵は「泊」の港湾施設である。両施設は琉球が離島を統治する上で欠かせないが、設置年代は明らかにされていない。そのため、両施設の設置年代を考察したい。

『中山世譜』（康熙40年（1701）編纂、雍正3年（1725）改訂）や『球陽』（乾隆8年（1743）～乾隆10年（1745）編纂）によると、「泊」の最古の記録は、咸淳2年（1266）における公館（泊御殿）と公倉（大島蔵）の設置である。いずれも同じ内容の記録であるため、ここでは『球陽』21条を引用する<sup>23</sup>。

七年、大島等の処、皆始めて入貢す/ 王曰く、海を隔て地を殊にす、素より我が政令の及ぶ所に非ず。何の為に來り貢するやと。對へて曰く、近ごろ我が海島、烈風猛雨の

患無く、五穀饒熟す。是れ必ず王国の善政、天地に感ずるの故なり。是を以て来り貢すと。王、悦びて其の貢を受く。而して厚く賞して送り帰す。次後毎年入貢す。東北諸島入貢の後、王輔臣に命じて公館を泊村に建てしめ、官吏を置きて諸島の事を治めしむ。即ち今の泊御殿是れなり。又公倉を泊御殿の北に建て、諸島の貢物を収貯せしむ。即ち今の天久山聖現寺是れなり。但公館・公倉は何れの年に之れを建て、並びに何れの代に公倉を以て寺院と為せしや、俱に年代考へ難し。故に附紀す。

『球陽』によると、咸淳2年(1266)に「大島等」が英祖王のもとへ入貢し、年貢を納める公倉(大島蔵<sup>24</sup>)と、「東北諸島」を統治する官吏が駐在した公館(泊御殿)が設置されたという。だが、『中山世譜』や『球陽』は王府の視点で記され、古琉球期の記録は往時を遡って記述されているため、内容を鵜呑みにすることはできない。実際、先行研究では英祖王代における奄美群島の入貢は否定的に捉えられている<sup>25</sup>。筆者としても、入貢地域が「大島等」という漠然とした呼称であることや、奄美大島・喜界島が15世紀中葉に琉球へ帰順したこと<sup>26</sup>から、本記録の信憑性は低いと考える。

それでは、「大島等」の入貢に付記された泊御殿・大島蔵設置の真偽はどうだろうか。『中山世譜』・『球陽』よりも早期に編纂された『中山世鑑』(順治7年(1650)編纂)には、奄美群島の入貢が記されているのみで、泊御殿・大島蔵の記述はない。つまり、両施設の記述は『中山世譜』・『球陽』を編纂する段階で何かしらの根拠を参考に組み込まれたのである。

『球陽』の外巻であり、琉球各地の伝承を集めた『遺老説伝』には、泊御殿・大島蔵の記述がある<sup>27</sup>。そのため、王府は『中山世譜』・『球陽』の編纂時に伝承を参考にしたとみられる。その際、両施設が実在したことは明らかであったが、設置年代までは特定できず、「大島等」入貢の項目に付記したのだろう。

泊御殿は他の史料にも確認できる。洪武23年、宮古島の與那覇勢頭豊見親は、察度王に朝貢する際、言語が通じず「泊」に留め置かれた。『白川氏家譜正統』には「遺老説伝曰く、惠源、始めて中山に上る時、旨を奉じて泊御殿に留泊す。此の時、島、人民<sup>こぞ</sup>挙って琉語に通ぜず者甚だ多く、而して辨事能わず。是れに由りて、惠源、命を奉じ、伶俐の者二十名を択び、泊御殿に留住し、琉語学ばしめ…<sup>28</sup>」とある。本記録は伝承という点に留意する必要があるものの、泊御殿が洪武23年に存在した可能性を示唆している。

一方、大島蔵は『中山世譜』・『球陽』以外に設置年代を特定できる史料が確認できない。ただし、大島蔵は奄美群島の年貢を貯蔵する施設であるため、ある程度の設置年代は推測できよう。『呉姓家譜 大宗 我那覇家』(以下、『呉姓家譜』と呼ぶ)によると、尚徳王は成化2年(1466)3月13日に喜界島遠征から凱旋した。その際、泊里主宗重(呉弘肇)の妻が王に水を献じたことで、宗重は泊里主に、妻は泊大阿母志良礼に任命された(詳細はⅡ-2-(1)で後述)。『琉球国由来記』によると、泊地頭(泊里主)は喜界島・奄美大島・徳之島・沖永良部島・与論島の年貢を司ったという<sup>29</sup>。



その傍証史料として、『おもろさうし』15巻に「あかいんこがふねたてばが節」というオモロがある。その内容は「一安里掟あさとおきて 親御蒲おやみ かま/貢 積むつ 首里親国しより おやくに/又天久口あめくぐち 親泊おやどまり/又那覇な は泊どまり 親泊おやどまり<sup>30</sup>」となっている。安里の役人・安里掟親御蒲は、年貢を天久口（≡泊港）や那覇泊（≡那覇港）から首里に運搬していた。このオモロを当時の時代背景から読み解くと、安里掟は安里川を遡上し、年貢を茶湯崎近辺に運んだと考えられる。

古琉球期の安里川については、現在よりも川幅が広く、水量も豊富だったことが指摘されている<sup>31</sup>。それを裏付けるかのように、康熙51年（1712）に崇元寺前の泊前道を敷設した真栄田親雲上義行（容元功）の家譜では、「泊前海涯之道」と記されている<sup>32</sup>。『琉球国旧記』にも、泊前道のある場所は「昔代。海涯無路。而往還不便。…」<sup>33</sup>と記されている。また、崇元寺前にある浮縄御嶽は、名称・神名が漁労に由来している<sup>34</sup>。古琉球期の崇元寺前は「海涯」となっており、安里川河口は入江のような風景を呈したのである。

安里川には、宮古の船が識名村の西、すなわち金城橋付近まで航行したという伝承がある<sup>35</sup>。近世に茶湯崎付近の指帰橋が石橋に架け替えられた際には、「山原諸船」が同地で停泊した<sup>36</sup>。また、近世の政治家・蔡温は、茶湯崎に港を作る計画を考案した<sup>37</sup>。これらの文献を考慮すると、古琉球期に安里川を遡上した船が存在したとしても不思議ではない。実際、古琉球期の状況を反映した『琉球国図』（図1）には、首里城南付近を流れる河川が大きく描かれている。ここでは、仮に「河川A」と呼ぶことにしたい。



図1. 『琉球国図』部分（沖縄県立博物館・美術館所蔵）

筆者は、河川Aを安里川に比定する。また、その支流は現在的那覇市首里金城町3丁目と4丁目の境目を流れる小川に相当し、察度王の子・崎山里主の屋敷跡といわれる崎山御嶽付

近から河川Aに合流している。河川Aとその支流は、首里城に近接しており、方角的にも南に位置しているため、安里川とみてよいだろう。那覇港・泊港に流れ着く河川は、安里川のほかに国場川や饒波川が挙げられるものの、両河川は首里城南付近を流れていない。国場川は、与那原町と西原町の境にある運玉森に源流があり、南風原町と那覇市の市街地を貫流したのち那覇港に流れ着く。仮に国場川を図に描くとすれば、「江南南蛮宝物在此/見物具足廣」と記された御物城の北側に河口を描くべきである。また饒波川は、大里城跡付近に源流があり、旧東風平村や豊見城市を経由したのち那覇港に流れ着く。そのため、饒波川が河川Aである可能性は低い。

以上のことから、『琉球国図』の首里城南付近に描かれた河川は、安里川に比定できる。本図には、大きく描かれた安里川と対照的に、国場川・饒波川は描かれていない。これは、『琉球国図』の原図を作成したといわれる博多商人道安が、商業活動を営む上で安里川を重要な河川として認識していたことの証左である。「石橋」について「此下有五水」（此の下、五水有り）とあるのも、安里川を遡上する船が橋の下を通過することを想定した記述であろう。安里川は船が遡上する小運河として機能しており、その河口付近に位置する大島蔵<sup>38</sup>が年貢の貯蔵施設として機能した可能性は十分にある。

次に、奄美統治と大島蔵の關係に着目したい。前出の『琉球国図』には、「毒大嶋鬼界之船皆入此浦」とあり、徳之島・奄美大島・喜界島の船が天久・安謝付近に入港していた<sup>39</sup>。『琉球国図』には、「鬼界嶋」（喜界島）・「大島」（奄美大島）・「小崎恵羅武」（沖永良部島）に、「琉球内」という記述が確認できる。『琉球国図』の記載情報によれば、琉球は奄美全域を統治しており、それに伴って同地域の船が「泊」近辺へ入港していた。

『琉球国図』と著しく類似した地図に、『海東諸国紀』所収の「琉球国之図」が挙げられる。『海東諸国紀』は、朝鮮人の申叔舟が成化7年（1471）に撰進した。そのことからして、「琉球国之図」が成化7年以前に作成されたことは明らかである。『琉球国図』と「琉球国之図」の關係性を分析した上里隆史らは、これらの地図が同じ原図をもとに作成されたと推測している<sup>40</sup>。そのため、原図は『海東諸国紀』が撰進された成化7年よりも前に作成された可能性が高い。『琉球国図』の記載情報は、成化7年以前の状況を反映しているといえよう。

「琉球国之図」の記載情報は、『琉球国図』よりも簡略的な記述となっている。そのため、奄美群島が沖縄島に入港した記述は確認できない。しかし、奄美群島の記述へ目を向けると、与論島以外の島々に「属琉球」（琉球に属す）と記されている。すなわち、琉球の統治は、成化7年の時点で奄美全域に及んでいたのである。なお、与論島のみ琉球へ帰順した記述がないのは、同島が沖縄島に最も近く、琉球領であることが自明のためであろう。

実際、文献史料でも琉球の奄美統治が15世紀中葉に及んでいたことがわかる。先述したとおり、『呉姓家譜』には、尚徳王が喜界島遠征から成化2年（1466）3月13日に凱旋したとある。また、琉球の奄美統治を研究した石上英一氏は、『朝鮮王朝実録』等の諸史料から、奄美大島が1440年代、喜界島が成化2年（1466）に征服されたことを明らかにしている<sup>41</sup>。



これらの地図・文献によると、琉球は15世紀中葉に奄美全域を統治しており、それに伴って同地域の船が「泊」近辺へ入港していた。大島蔵は、それらの船が運んだ年貢を管理するために必要な施設であることから、当該期には設置されていたと考えられる。

以上、本考察の結論としては、泊御殿が洪武23年、大島蔵が15世紀中葉に設置されていたと考えられる。泊御殿・大島蔵は「泊」を象徴する港湾施設であったが、近世になると変容を余儀なくされた。大島蔵については、奄美群島の割譲に伴って撤去され、跡地に聖現寺が移転した<sup>42</sup>。聖現寺は近世末期に欧米人を収容する施設となる。また泊御殿については、石垣のみになり<sup>43</sup>、跡地に漂着民を収容する木屋が建設された。この変容は、薩摩侵攻を受けた琉球の内実を反映している。

## 2. 泊里主と泊大阿母志良礼からみる「泊」

### (1) 泊里主・泊大阿母志良礼の任命年代について

『呉姓家譜』の1世宗重の記録には、泊里主と泊大阿母志良礼が任命された経緯が記されている<sup>44</sup>。下記はその読み下しである。

宗重夫妻は是れ泊邑の人なり。成化二年丙戌三月十三日、尚徳王、鬼界島を伐ち、帰国の時、聖舟、泊の港に湾む。<sup>いりこ</sup>是に於いて、諸臣及び男女、聖舟を出迎ふ。独り宗重の妻、水を頂き、水涯に迎ふ。王、問ひて曰く、汝、何人なり。対へて曰く、妾は是れ泊里主の妻なり。竊かに聞く、聖舟来るに、洋中日久しく、而して水変ずるを恐る。故に妾は此の新水を頂き来り、王に進めんと欲す。是に於いて、王、大いに悦びて曰く、此の人、乃ち此れ女中の忠臣なり。即ち、其の水を取り、而して之を用ひる。尋で王、宗重夫妻を召して宴を賜ふ。遂に夫を以て泊地頭と為し、妻を以て泊大阿母志良礼潮花司と為す。而して浦添間切名嘉瑠邑に田畠高四石二斗八合六夕六才<sup>(9)</sup>を賜ふ。今、其の地、名を泊大阿母志多禮次良（安謝の名寄帳に見ゆ）と曰ふ。然らば則ち、泊地頭と泊大阿母、此れ自り始まる。

上記によると、成化2年（1466）3月13日に尚徳王が喜界島から凱旋した際、泊村の住人・泊里主宗重（呉弘肇）の妻が王に水を献上し、それを喜んだ王が宗重を泊地頭に、妻を泊大阿母志良礼に任命した。両役職の任命年代は従来、成化2年3月13日とされる場合が多かったが、根拠史料である琉球家譜の編纂された年代や目的を踏まえると、厳密にそうとはいえない。

琉球家譜（以下、家譜）は王府公認の系図であり、本格的な編纂は首里城内に系図座が設置された康熙28年（1689）に開始された。そのため、家譜の古琉球期の記録は、往時を振り返る形で記述されている。田名真之氏が述べるように、家譜における1世（系祖）の人物は、人口に膾炙した伝承等を元に記述されている場合がある<sup>45</sup>。換言すれば、その当

時誰もが認める伝承が、1世(系祖)の人物の由来とされたのである。『琉球国由来記』の「泊之大阿母(今習氏也)由来之事」には「雖<sub>レ</sub>然、往古之事ニテ、御朱印於<sub>レ</sub>今失却トナリ<sup>46)</sup>」とある。泊大阿母志良礼の任命時に発給された辞令書は、『琉球国由来記』が編纂された康熙52年(1713)の段階で失われており、宗重夫妻の記録は例に漏れず伝承を参考に記述されたのである。この書誌情報を踏まえると、夫妻の任命年代を明言することは難しい。ただし、尚徳王の凱旋に伴って夫妻が役職に任命されたことは明らかである。任命年代を表記する場合には、成化2年3月13日頃とするのが妥当といえよう。

## (2) 泊里主と「泊」

まずは宗重の名前に着目しよう。彼の姓名は泊里主宗重(吳弘肇)であり、童名は家譜に記載されていない。古琉球期の人名は基本的に童名(真牛<sup>もうし</sup>や思五郎<sup>うみぐる</sup>などの名前)であるため、宗重の実名は不明である。彼の姓名のうち、唐名の「吳弘肇」と和名の名乗部分である「宗重」は、家譜編纂時に命名されたとみられる。当時、実際に使用されていたのは「泊里主」という役職名のみだろう。泊里主は泊地頭と呼ばれることもあるが、古琉球期に官人へ給された領地は「さとぬしところ」(里主所)と称されることから、泊里主と呼ぶべきである。真喜志瑤子氏が指摘するとおり、泊里主を泊地頭とするのは、里主所を近世の用語である地頭に置き換えた表記である<sup>47)</sup>。

泊里主は「泊」および硫黄島を司り、奄美群島の年貢を管掌した。『笠利氏家譜』の2世爲充の記録には、瀬戸内東間切に御物を収納した御蔵の存在が記されており<sup>48)</sup>、奄美の各間切に御蔵が存在したことが明らかになっている<sup>49)</sup>。そのため、奄美群島の年貢は奄美の各間切から沖縄島に運搬され、大島蔵に納められていたのだろう。『琉球往来』の「諸嶋斂物帳」によると、喜界島からは純清米・稗・蕎麦、奄美大島からは「新殿新造ノ具」として山椒・茸・庵米が貢納されている<sup>50)</sup>。大島蔵にはこれらの物品が貯蔵されていたと推測される。

泊里主に関係する役職として「奥渡<sup>おくど</sup>より上<sup>かみ</sup>の訥理<sup>さばくい</sup>」がある。本役職は国頭・与論島・沖永良部島を司るが<sup>51)</sup>、職務内容は判然としない。高良倉吉氏は奄美統治専任官と称し、王府にいながら奄美を管掌した役職と推測する<sup>52)</sup>。石上氏は、嘉靖16年(1537)の大島遠征による謀反鎮圧後、奄美全域を統治した官職と推測する<sup>53)</sup>。奥渡より上の訥理は、宗重の曾孫・大里親方盛実(毛見彩)と、彼の息子・國頭親方盛埋(毛元隆)が任命されたため、泊里主との共通点が指摘されてきた。ここでは、先行研究とは逆に両役職の差異に着目したい。

泊里主と奥渡より上の訥理は、①任命年代と②廃止・存続の違いがある。まず①については、嘉靖18年(1539)に盛実が奥渡より上の訥理に就任している<sup>54)</sup>。この年代は、宗重が泊里主に就任した15世紀後半から半世紀ほどが経過している。任命年代が異なるため、両役職の設置目的が違うことは明白である。奥渡より上の訥理は、年貢のみを司る泊里主

とは異なり奄美統治に直接関与した役職と思われる。

次に、②について考えたい。奥渡より上の訃理は『琉球国由来記』の「無<sub>二</sub>于今<sub>一</sub>官職・御蔵之事」（今なき官職・御蔵の事）に記載され、同史料が編纂された康熙52年（1713）の段階で廃官となっていた。その時期と理由は不明であるが、奥渡より上の訃理が与論島・沖永良部島を管轄していたことから、万暦37年（1609）の薩摩侵攻で奄美群島が割譲され、廃官となったのだろう。他方、泊里主は泊町奉行や泊地頭といった変遷を経て「琉球処分」まで存続した。泊里主は奄美群島を失ってもなお「泊」と硫黄島を管掌していたため、廃官を免れたのだろう。泊里主は奄美群島の年貢を司るだけであり、奄美統治には直接関与していないと推測される。

### (3) 泊大阿母志良礼と「泊」

尚徳王の喜界島遠征で注目すべきは、群衆が王の船を出迎えるなか、宗重の妻が一人で水を献上したことである。明治28年（1895）に知念原門中が作成した『玉城間切富里村世礼知念原ノ一門中元祖由来記』や、孫姓門中が作成した「尚巴志王統由来記」によると、彼女は尚泰久王の次女とされている<sup>55</sup>。これらの記録は信憑性に欠けるものの、宗重の妻が尚徳王の兄弟姉妹だと仮定すれば、彼女が王に水を献上したことや、呉姓が王家と結びついて出世したことも納得できる。

宗重の妻が水を献じた場所は、オシアゲ森という御嶽になっていた。この御嶽は先行研究で「御差上森」と表記されている<sup>56</sup>。オシアゲという単語は、沖縄語の「ウシャギ」・「ウサギ」を表していると思われる。オシアゲ森は泊交差点を北岸に入る右角にあり<sup>57</sup>、徒歩圏内に清泉の湧く坂中樋川がある。そのため、宗重の妻がオシアゲ森で水を献じた可能性は高い。

泊大阿母志良礼は儀保大阿母志良礼の下役にあたる祭祀職である。その職務は、主に3月と8月に4度御物参をし、オシアゲ森・ヤカン森・オタセ森御イベでオタカベを行うことであった<sup>58</sup>。この祭祀には、泊村の位衆（位階を有する者達）も「御拝人数」として参加した。泊村位衆は、泊大阿母志良礼と同じく3・8月の御物参で8つの御嶽を参拝した（表1）。

表1によると、泊村位衆の参拝する御嶽は安里村・天久村・安謝村に跨っている。このことについて、小島瓊禮氏は「多和田之御嶽に泊村の位衆が参るのは、古い泊村の祭祀の名残りであろう。<sup>59</sup>」と指摘する。彼が指摘するように、近世の行政区分に従って御嶽を参拝するのであれば、泊村位衆が安謝川支流の多和多川近辺に足を運ぶ必要はない。彼らの参拝する御嶽の範囲からは、安里・天久・安謝が宗教的に結びついた様子が垣間見える。

さらに、近世の行政文書である評定所文書では、泊村位衆が天久の寺院に足を運んだ様子が窺える。道光24年（1844）の「仏人一件書類」によると、12月30日の晩に祝部・内侍・泊村黄冠2人・筑登之座敷5人が天久寺（聖現寺）拝殿でご祈念を行うことが慣例化して

いた<sup>60</sup>。近世の聖現寺は真和志間切天久村にあるため、泊村の寺院ではない。それにもかかわらず、泊村位衆は聖現寺でご祈念を行っていた。ここで取り上げた泊村位衆の御嶽・寺院の参拝は近世の事例である。祭祀に寛容な古琉球期には、これらの儀式がより一層根づいていたはずである。

表1. 『琉球国由来記』にみる泊村位衆の参拝御嶽

御嶽名	神名	所在地
オキナワノ嶽	ヨリアゲ森カネノ御イベ	安里村
アガルイノ嶽	センノ森センノ御イベ	安里村
崇元寺之嶽	コバノミヤウレ御イベ	安里村
天久之嶽	オシアゲ森之御イベ	天久村
潮花ツカサ	ヨリアゲ森ノ御イベ	天久村
天久寺嶽	オダシ森之御イベ	天久村
天久之小嶽	コバノ森御イベ	天久村
多和田之嶽	アムトツカサヨキガラキミノ御イベ	安謝村

この辺りで泊大阿母志良礼に論旨を戻したい。安謝の名寄帳によると、彼女は「浦添間切名嘉瑠邑」（浦添間切銘苅村）の田畑を賜った。彼女が銘苅の田畑を賜った背景には、宗教的な理由があったと考えられる。浄土宗僧侶の袋中が万暦31～34年（1603-1606）に琉球へ滞在した際の見聞を記した『琉球神道記』では、天久権現（天久宮）の縁起について、「銘苅ノ翁子」が天久の山上にいる天女を目撃したとある<sup>61</sup>。天久権現の縁起が銘苅の人物に求められるのは、銘苅と天久の人々が同じ生活圏にあるため、宗教的な結びつきを有していたことを意味する。泊村位衆が天久や安謝の御嶽を参拝していたことも勘案すると、浦添南部の沿岸地域は宗教的に結びついていたといえる。

「泊」と浦添の結びつきは、宗重夫妻の息子・花城親方宗義（呉起良）の記録にも確認できる。宗義は浦添王子朝満（尚維衡）の娘を娶り、弘治年間（1448-1505）に浦添間切仲西地頭職に就任した。仲西は小湾川下流沿いの集落である。小湾川は浦添城近辺を流れており、城付近から海へ流れ出るという点で安里川と共通した特徴を持つ。仲西地頭職は、安里川河口を司る泊里主と地理的に共通した役職だった。さらに、宗義は弘治年間に朝満が浦添城に隠棲した際<sup>62</sup>、岳父として私財を投げ打ち、退廃した城の修繕を行った。呉姓と浦添王家は親密な関係を築いていた。

### 3. 泊系官人の特徴

「泊」には呉姓のほかにも官人が存在した。本稿では「泊」に居住した、もしくはそうであったとみられる人物を泊系官人と定義する。表2は筆者が管見の限り把握する泊系官人の一覧である。

表 2. 泊系官人一覧

No.	名 前	居住地	経 歴	生存が確認できる期間	典 拠
1	泊里主宗重 (呉弘肇)	泊村	泊里主	成化 2 年 (1466) 3 月 13 日 ~ 正徳 9 年 (1514) 9 月 15 日	『那覇市史』1-8、175 頁
2	花城親方宗義 (呉起良)	「泊」	浦添間切中西地頭職に任ぜられ、紫冠を叙位されたが、往古の出来事なので略す / 尚維衡浦添王子朝満の岳父として浦添城を修繕 / 王舅 / 具志頭間切花城地頭職	弘治年間 (1448-1505) ~ 正徳 11 年 (1521) 7 月 27 日	『那覇市史』1-8、175 頁
3	蔵旋楚辺勢頭	泊村	尚円王の勅命で泊村に居住 / 楚辺勢頭 / 大島奉行 / 南蛮に渡航し公事を終える / 伊平屋地頭職 / 伊是名玉御殿を代々守護	尚円王代 (1470-1476) ~?	『那覇市史』1-7、422 頁
4	國頭親雲上憲宜 (蘇長平)	「泊」	楚辺勢頭 / 国頭地頭職 / 大島奉行	不明	『那覇市史』1-7、424 頁
5	棚原親雲上憲里 (蘇用禮)	「泊」	小赤頭 / 花當 / 勢遣富筑登之 / 大下御蔵役 / 浦添御殿大屋子 / 久米仲地地頭職 / 在番 (久米島力) / 浦添御殿大親職 / 薩摩侵攻の際により泊港から奄美群島へ赴き、御立願を行う / 薩摩侵攻がなかったため御結願を行う / 佐鋪地頭職 / 西原間切棚原地頭職 / 浦添王子朝良大親職 / 座敷叙位 / 棚原里主所の米を納め、尚寧王を招く	嘉靖30年 (1551) ~ 崇禎 4 年 (1631)	『那覇市史』1-7、422 頁
6	東風平親雲上興長 (雍可懋)	「泊」	平等所大屋子 / 東風平間切総地頭職 / 泊地頭職 (泊里主)	嘉靖年間 (1522-1566) ~ 万暦 22 年 (1594) 8 月 6 日	『那覇市史』1-7、858 頁
7	目取真親雲上興方 (雍振警)	「泊」	若里主叙位 / 勢頭職 / 尚豊王が中城王子の時、上意により寒水川村に家屋敷を新造し、玉陵東辺に墓を拝領する / 豊見城間切根指部地頭職 / 座敷叙位 / 御物奉行 / 玉城間切目取真地頭職 / 平等之側	嘉靖25年 (1546) ~ 万暦 40 年 (1612)	『那覇市史』1-7、858 頁
8	豊見城儀保親方興房 (雍自雄)	「泊」	若里之子 / 大島在番 / 大美御殿大親 / 豊見城間切儀保地頭職 / 紫冠叙位 / 知行高三十石を賜る	嘉靖32年 (1553) ~ 万暦 40 年 (1612) 5 月 3 日	『那覇市史』1-7、858 頁
9	阿手津親雲上長孫 (明興孝)	「泊」	阿手津大屋子 / 勢治荒富引之御益當 / 勢治荒富大下司文子 / 伊江島伊平屋嶋按司掟 / 黄冠叙位	嘉靖35年 (1556) ~ 万暦 37 年 (1609) 10 月 26 日	『那覇市史』1-7、680 頁
10	喜屋武親雲上長昌 (明信道)	「泊」	小赤頭 / 大下司文子 / 石奉行筆者 / 筑登之座敷叙位 / 黄冠叙位 / 御殿勢頭役 / 世寄富勢頭 / 喜屋武間切山城地頭職 / 金御蔵大屋子 / 相応富勢頭 / 東代官 / 謝国富勢頭 / 座敷叙位 / 中頭方内作奉行 / 勢遣富勢頭 / 知行高 20 斛を賜る / 喜屋武間切総地頭職 / 紀明奉行 / 宮古主部	万暦元年 (1573) ~ 崇禎 9 年 (1636) 1 月 5 日	『那覇市史』1-7、680-681 頁



No.	名 前	居住地	経 歴	生存が確認できる期間	典 拠
11	久米具志川筑登之親雲上 義貫 (谷肇昌)	「泊」	永良部 (記録欠) / 聞得大君御殿儀者大屋子 / 黄冠叙位	嘉靖19年 (1540) ~ 万暦28年 (1600)	『容姓家譜 大宗山田家』 28-29 頁
12	具志川筑登之親雲上義重 (容維祚)	「泊」	花當 / 慶賀王舅 / (判読できず) 筆者 / 筑登之座敷 / 入閨し公事を終える / 黄冠叙位 / 冊封使が帰路につかず、音信を問ひ尋ねる / 官舎 / 西原間切・浦添間切・中城間切・北谷間切の作當となる / 勢治荒富勢頭 / 国頭代官	嘉靖37年 (1558) ~ 天啓3 年 (1623)	『容姓家譜 大宗山田家』 30-32 頁
14	我謝親雲上篤當 (蘭遠墓)	「泊」	大島湾之首里大屋子 / 大島から帰島後、西原間切我謝地頭職に任ぜられる	嘉靖24年 (1545) ~ 万暦39年 (1611) 8 月18日	『那覇市史』1-8、560-561 頁
15	糠中城掟	上泊	尚清王の「大島征伐」で与湾大親が自害。その後、奄美大島から沖繩島に連行される / 百次掟職を勤めていた際に働きが良く、上泊に田宅を賜る	尚清王代 (1527-1555) ~ ?	『那覇市史』1-7、515 頁
16	大浦添親方良憲 (馬良詮)	上泊	家来赤頭出身で御中門閨人 (門番) / 東宮之養父、すなわち浦添間切総地頭職となる / 進貢使者 / 三司官 / 草地浮織冠叙位 / 死後上泊の墓に葬られることを望んだが、国王が養父のよしみであり、泊の道が遠く、国王みずからの見送りに不便であった。そのため、法司官 (三司官) へ特別に命じて見上森の臺を賜った。出葬の日には国王みずからの弔いを受けて見送られた	嘉靖年間 (1522-1566) ~ 1563年	『那覇市史』1-7、517 頁
17	安里大親清信 (毛興文)	若狭町 安里小路	安里地頭職	尚徳王代 (1461-1469) ~ ?	『沖縄文化の遺宝』142 頁。
18	安里親方清賢	若狭町	安里地頭職 / 首里立岸邑へ移住	不明	『沖縄文化の遺宝』142 頁。
19	伊指川子元長 (姚是安)	「泊」	泊筆者を勤めていた際、薩州から兵船が来たとの知らせがあり、飛脚として大島へ赴く / 薩州から琉球の田地を観察するために使者が訪れた際、筆者を勤める	万暦年間 (1573-1619) ~ 1610年 5 月17日	『姚姓家譜 支流 鉢嶺家』 6-7 頁

※『那覇市史』1-7は、『那覇市史資料篇 第1巻7 家譜資料三』、『那覇市史』1-8は、『那覇市史資料篇 第1巻8 家譜資料四』の略記である。

※ No.17 および No.18 の典拠である『沖縄文化の遺宝』は、『毛姓家譜正統』の引用に基づいている。

※「居住地」の項目は、史料に記載されている場合はそれに従った。筆者が婚姻関係や役職、父母および門中全体の記録から居住地を推測した場合は、「泊」と記載した。

※「生存が確認できる期間」の項目は、生年が明らかな場合は「生年～死亡年」を、生年が不明な場合は「生存が確認できる年代～死亡年」を記載した。

表2からは、泊系官人と奄美群島の関連が確認できる。18人中10人が奄美群島に関与しており、大島奉行（No.3・4）、阿手津大屋子（No.9）、大島湾之首里大屋子（No.14）など、奄美関係の役職が散見される。当時、奄美関係の役職は官人の居住地によらず任命されたはずだが、表2における奄美群島の頻出度を踏まえると、奄美関係の役職は泊系官人が多く任命された可能性がある。翻って、奄美群島のほかに関連のある離島は久米島のみで、先島諸島との関連は見出せない。その背景には、奄美群島が15世紀中葉から王府の統治下に属するのに対し、先島諸島は16世紀から本格的な統治下に属するという違いが挙げられる。本表に限って言及すると、泊系官人は先島諸島よりも奄美群島との関係が深いといえる。なお、久米島に関しては、久米具志川筑登之親雲上義貫（容肇昌）が、久米具志川間切を拝領した可能性がある（No.11）。

次に、多くの泊系官人が地頭職に任命されたことに注目したい。通常の地頭地拝領に加えて、泊里主への就任（No.1・6）や、<sup>ぬかなかすくうち</sup>糠中城掟が上泊に田宅を賜った事例（No.15）を含めると、18人中13人が地頭地を与えられている。家譜に記載された古琉球期の人物は、同史料が本格的に編纂された康熙28年（1689）まで家系が継承された者である。地頭地を賜ったとしても、家系が没落して家譜に記載されない人物もいたはずであり、実際には表2より多くの官人が地頭地を拝領したと思われる。これに対して、近世中期以降の泊士（泊村に居付のある士）が地頭地を賜る事例は稀である。近世の平士にとって、地頭地の拝領は出世の最高到達点であり、そのために無給の役職や旅役を務める必要があった。古琉球期の官人がどのような過程を経て地頭地を手にしたのか定かではないが、半永続的に作得を得られる点で地頭職は魅力的なポジションであった。多くの泊系官人が地頭地を拝領し、なかには総地頭職に任ぜられた人物（No.16）もいることから、彼らには出世の可能性が大いにあった。だが、近世中期以降になると、士の居住地ごとに出世コースへ差が設けられ、泊士は出世から遠くことになる。古琉球期と近世中期以降の出世における落差が最も大きいのは、泊系官人（≡泊士）といえよう。

泊系官人の出世を表す史料として、『毛氏安里大親由来書』<sup>63</sup>がある。同書によると、元来泊村の大城掟であった清信は、首里・那覇間を往来していた金丸（後の尚円王）と出会う。その際、清信は金丸の素質を見抜き、金丸の即位後、彼は安里地頭職に任命されたという。同書は伝承をもとに作成されたため、後世に脚色された部分が多い。だが、安里が首里・那覇間の往来に利用される要地であり、泊系官人がその土地柄を生かして出世したことは事実である。さらに、『琉球国由来記』によれば、古琉球期的那覇里主は、首里・那覇・「泊」の3地域から選ばれており<sup>64</sup>、泊系官人は那覇で出世することも可能だった。

泊系官人は、琉球の北方地域から「泊」に移住し、沖縄島の社会に影響を与えた。それを顕著に示すのが蘇姓と馬姓の成り立ちである。まず、蘇姓については、伊平屋島出身の元祖・蔵掟楚辺勢頭が尚円王の勅命で泊村に居住し、大島奉行等の役職を勤めた（No.3）。『伊是名銘苧家文書』によると、彼は尚円王の叔父（尚円王の父・尚稷の弟）とされる<sup>65</sup>。それを

裏づけるかのように、家譜の序文には蔵掟が伊平屋島地頭職に任ぜられたことや、彼の一族が伊是名玉陵を代々衛護したことが記されている。彼の息子の國頭親雲上憲宜（蘇長平）は、國頭地頭職に任ぜられた後、父と同じ大島奉行として奄美大島へ赴いている（No.4）。

次に馬姓については、元祖・与湾大親<sup>ゆわんうふやー</sup>が奄美大島に居住していたが、大島の酋長らの讒言により尚清王が発した軍の征伐対象となり、自害した（いわゆる「大島征伐」）。息子の糠中城掟は捕虜として沖縄島に連行されたが、百次孥職を勤めた際に働きが良く、上泊に田宅を賜った（No.15）。また彼の息子・大浦添親方良憲（馬良詮）は、浦添間切総地頭職に任ぜられ、三司官となった（No.16）。良憲は死後、上泊の墓に葬られることを望んだが、尚元王の養父であったため、王自らが「泊」へ赴くには不便という理由で首里の見上森の墓を賜った。のちに馬姓は代々三司官を輩出する名門となる。

泊系官人の流動的な移動は、近世になると確認できなくなる。琉球北方の離島から王府中枢の役職に出世する事例はみられず、それどころか町方内部の移住すら制限されるようになってしまう。泊土の出世は制限され、泊村の最高位職である泊頭取に就任しても、地頭職を給されることは稀である。奄美群島は天啓4年（1624）に薩摩藩の直轄地（御蔵入）となり<sup>66</sup>、泊土が上国や江戸立の途中で立ち寄ることはあっても、奄美関係の役職に就任した事例はみられない。泊土の待遇悪化は、奄美群島を失った琉球の内実を反映している。

## おわりに

「泊」は、天久・安里・安謝・銘苅と結びつき、奄美群島や宮古島に開かれた域内港だった。これらの地域のうち、奄美群島は天啓4年に薩摩藩の直轄地となり、琉球では奄美への関心が失われてしまう<sup>67</sup>。そのこともあってか、先行研究では奄美群島が沖縄島に与えた影響はあまり注目されていない。だが、泊御殿・大島蔵が存在し、泊系官人の多くが奄美関係の役職へ就任していることからわかるように、「泊」は奄美群島の人的・物的影響を受けて形成された。奄美群島は琉球の版図の約3分の1を占めており、琉薩間の航路における要地となっていた。奄美は古琉球期における王国の実態を把握する上で欠かせない地域であり、その重要地域と沖縄島を結びつける存在が「泊」だった。つまるところ、「泊」は北方への島嶼ネットワークを持つ「古琉球」を支える港湾地域だったのである。その背景には、港湾として発展した天久や、交通の要衝である安里、宗教的に関わりのある安謝・銘苅が存在し、有機的に結びついていた。「泊」は、琉球域内の離島（奄美・宮古<sup>68</sup>）と、周辺地域（天久・安里・安謝・銘苅）が混じり合う中で形成された。

この特殊な「泊」という地域は、浦添南部の沿岸地域と多方面で結びついている。かつて伊波普猷氏は、沖縄の港が牧港・泊・那覇の順に開けたと述べた<sup>69</sup>。15世紀後半に天久が浦添間切に属し、呉姓が浦添南部と密接に関わる様子は、中山王権の主要港が牧港から「泊」へ南遷する過程を表している<sup>70</sup>。本現象は、察度王の浦添城から首里城への遷居に伴って生じており、王国の形成・展開と連動している。「泊」の特殊性からは、大交易時代初期にお

ける王国の胎動が垣間見える。

大交易時代の中頃、呉姓は活動拠点を那覇に移したとみられる。「那覇由来記」によると、那覇の地名は呉姓の家にある怪石に由来するという<sup>71</sup>。5世の幸地親方宗廣（呉國卿）は万暦30年（1602）に御物城職、万暦33年（1605）に那覇里主へ就任した。呉姓は那覇に移住し、有力な地位を築いたのである。「泊」と那覇の関係性については、港の使い分けや官人の比較をとおして吟味する必要がある。それらの調査は別稿に譲り、ひとまず擱筆したい。

## 主要参考文献

### 【史料】

『伊是名銘苅家文書』那覇市歴史博物館蔵

沖縄県教育庁文化課編（1979）『沖縄文化財調査報告書 第十八集 昭和五十三年度 辞令書等  
古文書調査報告書』沖縄県教育委員会

沖縄県教育庁文化課編（1985）『沖縄県文化財調査報告書 第六十九集 金石文－歴史資料調  
査報告書V－』沖縄県教育委員会

小野武雄（1969）『近世地方経済史料』第1巻、吉川弘文館

嘉手納宗徳（1978）『沖縄文化史料集成6 球陽外巻 遺老説伝』角川書店

亀井勝信（1980）『奄美大島諸家系譜集』国書刊行会

球陽研究会編（1974）『沖縄文化史料集成5 球陽 読み下し編』角川書店

崎浜秀明（1984）『蔡温全集』本邦書籍

申叔舟著・田中健夫訳注（1991）『海東諸国紀』岩波書店

袋中著・横山重編（1970）『琉球神道記』角川書店

那覇市企画部市史編集室編（1982）『那覇市史資料篇 第1巻7 家譜資料三』那覇市企画部  
市史編集室

那覇市企画部市史編集室編（1983）『那覇市史資料篇 第1巻8 家譜資料四』那覇市企画部  
市史編集室

平良市史編さん委員会編（1981）『平良市史 第3巻 資料編1 前近代』平良市役所

外間守善校注（2000）『おもろさうし（下）』岩波書店

外間守善・波照間永吉編（1997）『定本琉球国由来記』角川書店

『毛氏安里大親由来書』那覇市歴史博物館蔵

『姚姓家譜 支流 鉢嶺家』那覇市歴史博物館蔵

『容姓家譜 大宗 山田家』那覇市歴史博物館蔵

横山重（1972）『琉球史料叢書』第3巻、東京美術

琉球王国評定所文書編集委員会編（2001）『琉球王国評定所文書』第18巻、浦添市教育委員会  
『琉球国図』沖縄県立博物館・美術館蔵

## 【書籍・論文】

- 安達義弘（1998）『祖先崇拝からみた沖縄的自己アイデンティティ』九州大学大学院博士論文
- 安里進・外間政明編（2022）『古地図で楽しむ首里・那覇』風媒社
- 石上英一「琉球の奄美諸島統治の諸段階」歴史科学協議会編（2000）『歴史評論』No.603、校倉書房
- 伊波普猷・服部四郎・仲宗根政善編（1993）『伊波普猷全集』第6巻、平凡社
- 伊波普猷編・外間守善校訂（2000）『古琉球』岩波文庫
- 荒野泰典・石井正敏・村井章介編（2010）『日本の対外関係4 倭寇と「日本国王」』吉川弘文館
- 上里隆史・深瀬公一郎・渡辺美季編「沖縄県立博物館所蔵『琉球國圖』—その史料的价值と『海東諸国紀』との関連性について—」日本古文書学会編（2005）『古文書研究』第60号、吉川弘文館
- 沖縄県文化振興会史料編集室編（2010）『沖縄県史 各論編 第三巻 古琉球』沖縄県教育委員会
- 鎌倉芳太郎（1982）『沖縄文化の遺宝』岩波書店
- 金武正紀（2009）「今帰仁タイプとピロースクタイプの年代的位置付けと貿易港」木下尚子『13～14世紀海上貿易からみた琉球国成立要因の実証的研究—中国福建省を中心に—』熊本大学文学部
- 栗野慎一郎「尚維衡の浦添隠棲について—関係史料を読む—」浦添市教育委員会文化部文化課編（2016）『よのつち 浦添市文化部紀要』第12号、浦添市教育委員会文化部
- 黒嶋敏「古琉球期における那覇港北部の景観」東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター編（2019）『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』第86号、東京大学史料編纂所
- 島村幸一（2021）『首里城を解く—文化財継承のための礎を築く—』勉誠出版
- 琉球船と首里・那覇を描いた絵画史料研究会編（2019）『琉球船と首里・那覇を描いた絵画史料研究』思文閣出版
- 高良倉吉（1987）『琉球王国の構造』吉川弘文館
- 田名真之（1992）『沖縄近世史の諸相』ひるぎ社
- 谷川健一（2000）『日本の神々—神社と聖地 13南西諸島』白水社
- 中世学研究会（2019）『中世学研究2 琉球の中世』高志書院
- 中世都市研究会編（2009）『港津と権力』山川出版社
- とまり会編（1974）『泊誌』とまり会
- 名嘉山光子「那覇付近の埋立てによる拡大」琉球大学地理研究クラブ編（1967）『琉大地理』第6号、琉球大学地理クラブ
- 名瀬市誌編纂委員会編（1983）『名瀬市誌（下）』名瀬市役所
- 那覇市企画部市史編集室編（1979）『那覇市史 資料篇 第2巻中の7 那覇の民俗』那覇市企



画部市史編集室

新島奈津子（2010）「古琉球における港湾機能と交易の実態」専修大学大学院博士論文

真喜志瑤子「琉球王国一五世紀中期以降の畿内制的な特徴と王城儀礼：官人組織と王城儀礼の変遷」法政大学沖縄文化研究所編（2012）『沖縄文化研究』38、法政大学沖縄文化研究所

橋本雄（2005）『中世日本の国際関係―東アジア通交圏と偽使問題―』吉川弘文館

真境名安興・島倉龍治編（1923）『沖縄一千年史』沖縄新民報社

屋部憲次郎訳注・解説（1986）『蕨姓家譜（大宗憲宜）訳注―奥島家―』屋部憲次郎

琉球新報社編（2013）『薩摩侵攻400年 未来への羅針盤 新報新書 [1]』琉球新報社

和田久徳（2006）『琉球王国の形成―三山統一とその前後― 琉球弧叢書12』榕樹書林

注

<sup>1</sup> 黒嶋敏（2019）「第一尚氏期における首里の外交を探る―画像史料の再検討から―」『中世学研究 2 琉球の中世』高志書院、69-95頁。黒嶋敏（2019）「古琉球期における那覇港北部の景観」『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』第86号、東京大学史料編纂所、4-11頁。

<sup>2</sup> 外間守善・波照間永吉編（1997）『定本琉球国由来記』角川書店、167頁。

<sup>3</sup> 球陽研究会編（1974）『沖縄文化史料集成 5 球陽 読み下し編』角川書店、103頁。

<sup>4</sup> 沖縄県教育庁文化課編（1985）『沖縄県文化財調査報告書 第六十九集 金石文―歴史資料調査報告書Ⅴ―』沖縄県教育委員会、62-63頁。

<sup>5</sup> 上里隆史（2021）「古琉球期における首里城の様相と変遷」『首里城を解く―文化財継承のための礎を築く―』勉誠出版、64-68頁。

<sup>6</sup> 三山の統一過程には諸説ある（和田久徳（2006）『琉球王国の形成―三山統一とその前後― 琉球弧叢書12』榕樹書林）。

<sup>7</sup> 前掲注1「第一尚氏期における首里の外交を探る」参照、76頁。

<sup>8</sup> 前掲注1「第一尚氏期における首里の外交を探る」参照、84頁。

<sup>9</sup> 沖縄県教育庁文化課編（1979）『沖縄文化財調査報告書 第十八集 昭和五十三年度 辞令書等古文書調査報告書』沖縄県教育委員会、27頁。

<sup>10</sup> 高良倉吉（1987）『琉球王国の構造』吉川弘文館、18-19頁。

<sup>11</sup> 前掲注3参照、235-236頁。

<sup>12</sup> 那覇市企画部市史編集室編（1982）『那覇市史資料篇 第1巻7 家譜資料三』那覇市企画部市史編集室、517頁。

<sup>13</sup> 鎌倉芳太郎（1982）『沖縄文化の遺宝』岩波書店、142頁。

<sup>14</sup> 橋本雄（2005）『中世日本の国際関係―東アジア通交圏と偽使問題―』吉川弘文館、117-126頁。

<sup>15</sup> 上里隆史（2010）「琉球の大交易時代」『日本の対外関係4 倭寇と「日本国王」』吉川弘文館、140-141頁。

- <sup>16</sup> 田名真之(2010)「港町那覇の展開」『沖縄県史 各論編 第三巻 古琉球』沖縄県教育委員会、387-408頁。  
なお、14世紀後半から15世紀初頭には那覇港で数百点以上の陶磁が一括して出土しており(瀬戸哲也(2019)「考古学からみた那覇港の形成と景観」『港津と権力』山川出版社)、この説は一考に値する。
- <sup>17</sup> 前掲注3参照、124-125頁。前掲注2参照、83頁。
- <sup>18</sup> 新島奈津子(2010)「古琉球における港湾機能と交易の実態」専修大学大学院博士論文、25頁。
- <sup>19</sup> 那覇市企画部市史編集室編(1983)『那覇市史資料篇 第1巻8 家譜資料四』那覇市企画部市史編集室、268頁。
- <sup>20</sup> 前掲注19参照、269頁。
- <sup>21</sup> 前掲注12参照、696頁。
- <sup>22</sup> 前掲注3参照、314頁。
- <sup>23</sup> 前掲注3参照、102頁。
- <sup>24</sup> 『球陽』・『中山世譜』には公倉としか記されていないが、『琉球国由来記』巻7の123条と『琉球国旧記』「天久山三社併聖現寺(在泊邑西)」には大島蔵とある。
- <sup>25</sup> 伊波普猷(1993)「中世に於ける沖縄と道之島との交渉―「阿摩和利考」の展開―」『伊波普猷全集』第6巻、平凡社、566-567頁。名瀬市誌編纂委員会編(1983)『名瀬市誌(下)』名瀬市役所、751-757頁。
- <sup>26</sup> 石上英一(2000)「琉球の奄美諸島統治の諸段階」『歴史評論』No.603、校倉書房、9頁。
- <sup>27</sup> 嘉手納宗徳(1978)『沖縄文化史料集成6 球陽外巻 遺老説伝』角川書店、166・173頁。
- <sup>28</sup> 読み下しは筆者による。平良市史編さん委員会編(1981)『平良市史 第3巻 資料編1 前近代』平良市役所、178頁。
- <sup>29</sup> 前掲注2参照、51頁。
- <sup>30</sup> 改行の斜線は筆者加筆。外間守善校注(2000)『おもろさうし(下)』岩波書店、174頁。
- <sup>31</sup> 名嘉山光子(1967)「那覇付近の埋立てによる拡大」『琉大地理』第6号、琉球大学地理クラブ、6頁。
- <sup>32</sup> 『容姓家譜 大宗 山田家』那覇市歴史博物館蔵、50-51頁。なお、冊封使全魁・周煌一行の様子を描いた「奉使琉球図巻」の「諭祭先王」には、泊前道が描かれており、「海涯之道」であったことがわかる(琉球船と首里・那覇を描いた絵画史料研究会編(2019)『琉球船と首里・那覇を描いた絵画史料研究』思文閣出版、98・99頁)。
- <sup>33</sup> 横山重(1972)『琉球史料叢書』第3巻、東京美術、18頁。
- <sup>34</sup> 伊波普猷(1974)「沖縄考」『伊波普猷全集』第4巻、平凡社、1974年、381-408頁。
- <sup>35</sup> 前掲注27参照、141頁。
- <sup>36</sup> 前掲注27参照、94頁。
- <sup>37</sup> 崎浜秀明(1984)『蔡温全集』本邦書籍、85-86頁。
- <sup>38</sup> 大島蔵の所在地は史料ごとに若干異なるが、おおむね聖現寺付近と思われる。
- <sup>39</sup> 上里隆史氏は船の入港先を泊港、黒嶋氏・麻生伸一氏は安謝港に比定した(前掲注1「第一尚氏期における首里の外交を探る」参照、86-92頁)(麻生伸一(2022)「海運・流通・交流からみる那

覇港と那覇』『古地図で楽しむ首里・那覇』風媒社、99頁)。筆者は天久口・安謝川河口の両方に入港した可能性があるとみている。

<sup>40</sup> 上里隆史・深瀬公一郎・渡辺美季編（2005）「沖縄県立博物館所蔵『琉球國圖』—その史料的价值と『海東諸国紀』との関連性について—」『古文書研究』第60号、吉川弘文館、38-40頁。

<sup>41</sup> 前掲注26参照。

<sup>42</sup> 前掲注33参照、136-137頁。

<sup>43</sup> 前掲注33参照、18頁。

<sup>44</sup> 前掲注19参照、175頁。

<sup>45</sup> 田名真之（1992）『沖縄近世史の諸相』ひるぎ社、117-119頁。

<sup>46</sup> 前掲注2参照、155頁。

<sup>47</sup> 真喜志瑤子（2012）「琉球王国一五世紀中期以降の畿内制的な特徴と王城儀礼：官人組織と王城儀礼の変遷」『沖縄文化研究』38、法政大学沖縄文化研究所、195頁。

<sup>48</sup> 亀井勝信（1980）『奄美大島諸家系譜集』国書刊行会、78頁。

<sup>49</sup> 弓削政巳（2010）「中山政権と奄美」沖縄県文化振興会史料編集室編『沖縄県史 各論編 第三巻 古琉球』沖縄県教育委員会、229頁。

<sup>50</sup> 袋中著・横山重編（1970）『琉球神道記』角川書店、143-144頁。

<sup>51</sup> 前掲注2参照、67-68頁。前掲注12参照、696頁。

<sup>52</sup> 前掲注10参照、191頁。

<sup>53</sup> 前掲注26参照、14頁。

<sup>54</sup> 前掲注12参照、696頁。

<sup>55</sup> 安達義弘（1998）『祖先崇拜からみた沖縄的自己アイデンティティ』九州大学大学院博士論文、167・197頁。

<sup>56</sup> とまり会編（1974）『泊誌』とまり会、5頁。真境名安興・島倉龍治編（1923）『沖縄一千年史』沖縄新民報社、177頁。

<sup>57</sup> 那覇市企画部市史編集室編（1979）『那覇市史 資料篇 第2巻中の7 那覇の民俗』那覇市企画部市史編集室、35頁。

<sup>58</sup> 前掲注2参照、155頁。

<sup>59</sup> 小島瓊禮（2000）「楚辺・那覇四町・久米村・泊の大あむ-那覇の港町の形成と祭祀組織」『日本の神々—神社と聖地 13南西諸島』白水社、258頁。

<sup>60</sup> 琉球王国評定所文書編集委員会編（2001）『琉球王国評定所文書』第18巻、浦添市教育委員会、242-243頁。

<sup>61</sup> 前掲注50参照、76-77頁。

<sup>62</sup> 朝満の浦添隠棲は文献ごとに経緯と年代が若干異なる（栗野慎一郎（2016）「尚維衡の浦添隠棲について—関係史料を読む—」『よのつち 浦添市文化部紀要』第12号、浦添市教育委員会文化部、41-51頁）。

<sup>63</sup>『毛氏安里大親由來書』那覇市歴史博物館蔵

<sup>64</sup>前掲注2参照、166頁。

<sup>65</sup>「琉球国三山王各流系旧案録」『伊是名銘苅家文書』那覇市歴史博物館蔵。

<sup>66</sup>小野武雄（1969）『近世地方経済史料』第1巻、吉川弘文館、383頁。

<sup>67</sup>高良倉吉（2013）「大国に埋もれず 独自の文化開花」『薩摩侵攻400年 未来への羅針盤 新報新書 [1]』琉球新報社、8頁。

<sup>68</sup>豊見親の逗留以降、「泊」に関する宮古の記録は確認できないため、宮古の船が早期に那覇へ入港するようになっていた可能性がある。

<sup>69</sup>伊波普猷編・外間守善校訂（2000）『古琉球』岩波文庫、112頁。

<sup>70</sup>牧港から「泊」へ南遷する過程において、安謝川河口をどのように位置付けるかという課題が残されている。安謝川支流の多和多川と銘苅川付近には12～14世紀前半の遺跡が確認されており、貿易船が安謝川に入港したという指摘がある（金武正紀（2009）「今帰仁タイプとピロースクタイプの年代的位置付けと貿易港」『13～14世紀海上貿易からみた琉球国成立要因の実証的研究—中国福建省を中心に—』熊本大学文学部）。

<sup>71</sup>前掲注2参照、158頁。